

トリガー使えば『宝具擬』が可能な説

癒しを求めるもの

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある人畜無害の社畜が転生して、神様に気に入られてチート身体手に入れたことで、仕事替わりに『宝具』展開できるものを探していく物語です。

最初は原作前ですが、後に原作に沿わせます。

## 目次

『突き穿つ死翔の槍』を鉄パイプで	1
かなり雑な『約束された勝利の剣』	13
模擬戦（木虎）『無明三段突き』く前編く	23
模擬戦（木虎）『絶劔・無穹三段』く後編く	34
『訴状の矢文』は超有能。そして――	42
『熾天覆う七つの円環』なかつたらドジで死んでたね（確信）――	50
究極の選択 先輩？後輩？――	58
高所恐怖症になる『壇ノ浦・八艘跳』――	65

## 『突き穿つ死翔の槍』を鉄パイプで

最初に言くと、僕は転生者だ。

社会人になって早数年。社畜の才能を發揮していた僕は無難に生き抜くため、会社員として日々、消化されることのない量の仕事をせつせと残業しながら片付けていた。

別に、作業の効率は普通だ。あくまで社畜としての才能(意味不明)があっただけで、特別優秀じゃない事務能力を駆使していた。

思えば中学生だったあの頃。

全てにおいて平均か、少し上の成績を維持して、生活態度も時折忘れ物があるくらいで悪くなかった僕は担任の教師に勧められて生徒会に入った時だろう。

勿論、庶務。所謂雑用だ。

相も変わらず無難に仕事をこなしていたらその習慣が定着していた。いつしか働くことが一種の趣味となるまで成長?した。

そこそこの給料とそこそこの友人に囲まれ、殆どないといっても過言ではない休日をダラダラと無駄に過ごした虚しいような、楽しい生活も、仕事帰りに起きた交通事故でおじやんになってしまった。

しかし、生前は全くと言っていいほどなかった運勢が味方したのか、僕は優しそうなお爺さんの神様とやらの会って転生することになった。

俗に言う転生特典も貰った。

まあ、僕はここでも無難に『頑丈な身体』にした。しかし神様は不思議そうにした。

「もつと欲を叶えてもバチは当たらんよ?」と。

——いや、別に欲も何も。

身体が頑丈なだけでホントに助かるんで。あ、ならついでに精神耐性もあつたら嬉しいです。具体的には徹夜作業でも平気なレベル

だったら幸いです。

そう言ったらなんか泣かれた。そしてお茶と茶菓子を出示してもらった。今まで食べた菓子の中で一番美味しかった。

そのまま、中々言えない愚痴を流れて聞いてもらったり、聞いたりして過ごすこと数日。漸く転生の時がやってきた。

どんな世界か分からないらしい。だからって頭を下げないでください。寧ろ何もお返しできないこつちがするのに。

——え？僕が元気に第二の人生を過ごしてくれればいい？

本当、感謝の一言では言い表せないくらい良くしてもらった。これから毎日、感謝のお祈りをしますね。作業にならないよう心を込めて。

それを聞いてか、また泣いた神様に何度も感謝の言葉を述べ、こうして僕は平和な日本に転生した——

——筈だった。

「……………What?」

中学生になったある日、僕は今も尚破壊されている三門市を見て無意識に呟いた。

「…あの白い……………ゴキブリ? いや、コオロギ?」

転生したと自我を持ったのは三歳の誕生日。

両親が居らず、孤児院でお世話になっているこの頃。頑丈な身体を

使って子供たちと和氣藹々と遊び、二度目の学校生活で必要になったノートなどの物資を少ないお小遣いでやりくりしながら買い物を終えた帰り道に、それは突如として現れた。

いきなり現れた巨大化した昆虫のような何かが大量発生しており、街を、人を、殺戮の渦に貶めている。

「……………あの子達は……………」

少し高い丘にいるため、街全体が見渡せる。神様が余計に身体能力も上げてくれていたのか、視力はかなりいい。

かなり広い範囲にコオロギのような奴や、大きな四足方向のそれが散らばって蹂躪を繰り返している。

その範囲内に、弟妹のように接している孤児院の子供達がいる施設があった。

——少し、話を変えよう。

転生する前。神様と話していると休日の過ごし方について話した。丁度神様も休日扱いにしてもらったらしく、幻想郷のような神界？という場所を眺めながら縁側で茶をしたり、将棋を試みたりとゆっくり過ごしていくうちに、気づいたのだ。

——もう、ゆっくりしよう。と

仕事に興味？——違う。それは唯の現実逃避だったのだ。

じゃあ、何をすればいいのか——のんびり、ゆっくり人生を謳歌しよう、と。

僕が生み出した最終結論を聞いた神様は、なんか「お主の特典を強化すれば、必ず報われるじやろ。安心して楽しむんじやぞ」と言われてたけど、これ以上頑丈にしたらゾンビじゃないの？と思った。

でも、神様の目が慈悲溢れるもので、僕のいままでが報われたような気がしたので何も言えなかった。

#### 閑話休題

短い時間だったが、この転生を僕は意識をガラリと変えた。

——仕事は趣味じゃない。働くのは自分の利益のために！

これ以上身をすり減らすのはゴメンだと初めて思えた新しい人生。年齢も年齢だから労働はしないが、中学生では部活も、勿論生徒会庶務にも入ってない。

放課後は気ままに散歩したり将棋したり、そこそこ走っても疲れないう身体で軽く運動するくらいだ。

だけど、今はその考えを破棄する。

昔からお節介とよく言われる僕は、子供達や親代わりとして育ててくれた役員さん達を見捨てて逃げる道はない。

少しばかり震える足を掌で叩き、街の中へ駆け出した。

状況は酷いの一言。

破壊されて瓦礫となった建物には血を流す人が多くいた。息がある人を昔、会社であった災害訓練の時に覚えた簡易の処置を済ませて、体力が残っている人の手を借りながら、変な奴らがないルートを探り、避難を開始する。

しかし、何事も上手くいかないものだとわかった。

「——きゃああああっ！」

近くで悲鳴が聴こえた。

急いで其方に向かうと、恐怖のあまり腰が引けて座りながら後退りする同い年くらいの女子がいた。

だが、目の前には素早い動きで少女に迫るコオロギ擬が。

「チツ……！」

瞬間的に動き出した僕は、鋭利にとがった脚部を振り上げる直前のコオロギ擬の前まで飛び出す。

丸腰の僕に防ぐ手段はない。故に回避を選択し、少女を抱き抱えて

横に転がる。

「…痛い」

「……え。あ、あれ？」

少女に怪我のないように慎重になりすぎて、コオロギ擬の攻撃が背中  
中の服を切り裂いた。

一直線に走る痛みを脳が受け取るが、すぐに消える。  
つまり大した傷ではない。

「…立てる？」

「え、あ、あの……」

「…失礼します」

「え？……え、わっ!？」

転がる流れで上半身を起こした僕は、胸に収まるように抱きついた  
状態になってしまった少女に声をかけたが、混乱してまともに会話で  
きかない。

一刻も時間が欲しい僕は、一応の断りを入れて少女を腕で抱えて走  
り出す。

本当だったらそんな勇氣はない。寧ろセクハラで訴えられないか  
ドキドキして過ごした社畜時代が思い出されてしまうからだ。

「…しつこい……!」

反応速度は遅いようだが、コオロギ擬は此方に狙いを定めて走って  
くる。

一人だけなら追いつかれない。だが、今は少女を抱えているため上  
手く走れない。

このままでは無抵抗に殺られる。



「…賭けになるけど……仕方ない」

「あ、あの……」

「……ごめん、危ないから引っ付いてて」

「は、はい……！」

少し落ち着いたのだろう。声をかけてきた少し茶髪のセミロングをした少女にぶっきらぼうにお願いして動きやすいような体勢になってもらう。

……緊急事態にセクハラ扱い、ホントにされないよね？

震えながらもすっかりくっ付き——抱きつかれている状況に女性慣れ皆無の僕は一瞬だけ硬直した。

このままでは不味い……！

だから、禁断となった社畜心を思い出せ僕よ！

「……よし大丈夫」

仕事用の顔に切り替え、僕は目的地の下町工場に駆け寄った。

すぐ迫るコオロギ擬を確認しながら、丁度いい物——見つけた、長めの鉄パイプ。

少女を抱える左手は無理なため、右手一本で鉄パイプを握ると、夕イミング良くコオロギ擬も工場の中に入ってきた。

コンテナの後ろに隠れて、少し息を整えると、がんと大きな音を鳴らした。

せつかく隠れたのに、と心配そうに見てくる少女に目を合わせ、子供たちにやるように頭を軽く撫でた後、集中するために目を閉じる。

ガツンと音がした。

——コンテナの上にコオロギ擬が飛び乗った音

カツン、カツンと音がした。

——その上を歩くコオロギ擬の音

そして、ギギイッと金属が擦れる音。

「……今！」

声と共に、鉄パイプを狙った部分に突き上げる。

予測通り、此方を覗き込むような位置にいたコオロギ擬の腹部に目掛けて鉄パイプの先端が突き刺さる。

が、貫通することはなく、鈍い音がするだけ。

「…分かってたがつ…！」

貫通しないだろうというのは何となく分かっていた。だから、僕の狙いはそこじゃない。

鎧のように硬い甲羅の間、そこに鉄パイプを引っ掛けて、地面に思いつき叩きつけた。

コオロギ擬が空中に放り出された間に力を調節して、奴が上下反対を向くように。

すると、案の定、奴は起き上がれないでもがいていた。

「凄…！」

隣から感嘆の声が聞こえて少し気分がいいが、先にコオロギ擬の処理だ。

生まれ変わってから何かと感じる直感だと、一部甲装の着いていない目？のあたりが怪しいが……。

「…ふっ！」

ジタバタ動くコオロギ擬の目に思いつき鉄パイプを刺した。次は漸く貫通し、コオロギ擬は完全に動かなくなったようだ。

———なんか、仕事終わりみたいに疲れた。

「あ、あのーけ、怪我はない？」

「…大丈夫。特に問題は——」

「あつ！背中！大きな傷がつ！………つて、あれ？」

コオロギ擬が動かなくなつて安心したのか、少女が安全確認をしてきた。痛みも何処もないため素直に頷いたが、背中を見た少女が息を飲んだ。

そう言えば切られたなあ、と他人事のように思っていると、可愛らしく首を傾げる少女。

つて、よく顔みたらかなりの美少女だった。

後で慰謝料来ないかな？お小遣いないんだけどな？と考えていると、おずおずと少女が尋ねてきた。

「ねえ、あの、背中、切られたよね？」

「…血は出てないなら大丈夫じゃないかな？」

「えーつと、確かに傷はないんだけど……」

ふむふむ。

僕の身体が『頑丈』だ、と。

神様。強化してくれたのは有難いですけど、人や建物を八つ裂きした刃物も傷つけてないなんて聞いてません。嬉しいですけど。

「…いけない。時間がなかったんだ」

神様には感謝しますが、まだ子供たちの元に着いていない。残業をするような気分だが、もう一度気を入れなければ。

「えつと、あの、名前は？」

「…阿宮あみや 輝耀きよう。苗字は好きじゃないから名前で呼んで」

「わかった、輝耀くんだね。あつ、私は綾辻遥。遥でいいよ？」

「…え？名前？」

少し余裕が持てたのか、話をしながら互いに情報交換をする。

その際、名前呼びを提案されたが、此方は前世含めて女友達はゼロ。苗字は一応、僕を捨てたこの世界の肉親のもののため好んでないのだ。

こつちから言つといてあれだが、僕は綾辻と呼ぶことにした。

さて、話を戻そう。

あれから、避難の列から離脱したため、綾辻を一人置いていく訳にはいかない。

歩けるまで回復したとのことなので、服を掴ませながら何かあつても対処しやすいようにできるだけ近づけながら一緒に孤児院に向かう。

え？なんで手を握らないのかつて？

痴漢扱いで警察に行くのは嫌です。

ちらちらと見てくる綾辻を気にしながら、孤児院のある方面に向かった。

その時には時間がかなり経過しており、息がある人は避難しに移動し、手遅れな人のみが倒れていた。

口元を抑えて震える綾辻に言葉をかけながら進んでいくこと数十分。

少しずつだが数が減っているコオロギ擬や大きい奴に遭遇することなく逃げ切ったことに安堵していると、丁度孤児院が見えた。

そして、その近くに大きい奴が。

そいつの視線の先には、たまに遊びに来て子供たちと遊ぶ小学生の女の子と、その子を庇うように身を小さくする少し年下のような小柄なショートカットの少女がいた。

「…綾辻！あの二人を頼む、注意をこつちに向ける」

「輝耀くん！」

綾辻にも危害が及ぶ可能性があるが、絶対にさせない。

わざと声を出して綾辻の名前を呼んで、さらに大きい奴に近づいたため、完全に奴の視線は僕に向いた。

元いた場所を一瞥すると、綾辻は此方を見ながら、指示通りに救助に向かったようだ。

一先ず安心と思った、その矢先だった。

「…っ！——ビームまで装備してるなんて……！」

大きい奴の目と思わしき部分に青白い光が凝縮していた。

嫌な予感がしたため、地面に鉄パイプを刺して、ギリギリのタイミングを見計らって逆方向に転換する。

それと同時にビームが発射され、方向転換していなければ直撃していたビームがアスファルトを粉碎した。

「…さっきのコオロギより遅い。でも、高さが面倒だ」

奴らの弱点と思わしき目と同じ位置に立つには、少なくとも2〜3階は登る必要がある。その間、相手は待ってくれないだろう。

僕の能力じゃ、奴を仕留める、もしくは足止めは難しい。

思考が優先的に行われていたため、先程よりビームの撃つタイミングを見誤った。

「…まじ——」

直撃は避けられた。

だが、強烈な爆風が僕を襲う。

口の中に砂が入る不快感よりも、全身を打ち続ける痛みが対抗策を考える邪魔をする。

痛みを抑えて受身をとって、起き上がった僕は煙を吸わないように身

を屈める。だが、すぐにまた光った。

煙をなぎ払うように放たれたビームが通過すると、大きい奴がかなり近づいてきていた。

いつの間に。そう焦る僕を待つことなく、光はどんどん収縮していく。

名前を呼ばれたようなきがしたが、応えている時間はない。

早く対策を……………!

選択肢のない中、必死に使えるものを探す僕に、小さな何かが飛んできた。

「——トリガー起動！そう言うんだ！」

遠くから声が聴こえた。

そして、器用に手に納まった物を確認し、指示に従うべきという直感に従って声を上げた。

「…『トリガー起動』」

——トリオン確認……………該当なし。

——臨時接続……………実行。

——トリオン体完了

その時間僅か一秒以下。

身体が変わっていく感覚に違和感を覚えながらも、より研ぎ澄まされた五感と身体能力に気づいて動き始めた。

前に前身。

一歩で通常の数倍もの距離を短時間で詰められたことに驚きながら、ビームを撃った直後で動きが鈍い大きい奴を下から見上げた。

「…行ける……………！」

そのまま持っている鉄パイプを両手で掴んだ。

身を屈めて、感覚に任せた力を出して地面を蹴る僕は、身体を捻って鉄パイプを、異常な速さで投擲する。

「……『突き穿つ死翔の槍』」

何故か、前世で友人に勧められてプレイしていたゲームの宝具名を口に出しながら。

……死にかけだった身で言うのは躊躇うが、その、スカツとしました。

「あの少年が迅が言っていた分岐点になる子、か……」

そして、自分のミスで輝耀を危険な目に合わせてしまったと反省をする刀を持った男性は、迅と呼んだ青年の言ったように予備のトリガーを持っていたことに安堵しながら、大の字で倒れた彼の元に駆け寄った。

## かなり雑な『約束された勝利の剣』

三門市を襲った悲劇から数年が経過した。

大規模侵攻と名付けられた近界民<sup>ネイバー</sup>と呼ばれる異世界からの侵略者達は、いつの間にか数が減っていた。

その要因となったのは、後に「ボーダー」と名乗る組織の力が大きい。

自身が持つトリオンと呼ばれるエネルギーを使うトリガーを使用することで、ネイバー相手に戦闘が可能となるのだ。

あの日、僕が危機から生還できたのもトリガーのおかげだ。

バムスターと呼ばれる捕獲型トリオン兵を駆逐した僕は、トリガーを投げ渡した忍田と名乗った男性に付いて、救助を援護していた。

ネイバーは完全に居なくなり、廃墟と化した三門市を物寂しく眺めていると、なんか街をびよんぴよん移動している人達が集まった。つていうかトリガーを使っている人達だ。

その時のボーダーは少数人だ。

トリガーという未知の技術を公にせず今まで動いていたため、全員が顔を知る中、僕だけ除け者だったので忍田さんが気を使って紹介してくれた。

その時の僕は残業後の疲れに似た疲労が蓄積しており、目を濁らせて、ぼーっとしていたのが運の尽き。

なんか後日話がしたいと言われて頷いていた。

そこからはトントン拍子でことが進む。

「…ボーダーを作った?」「…ボーダーに入らないか?」「…演習をしてみないか?」「…模擬戦もするの?」「…普通に任務もあるの?」「…ラッキングでるの?」

と、僕は疑問符を浮かべながら、着々と外堀を埋められて、ボーダーに入った。

流されやすいのは社畜時代の賜物だ。全然嬉しくないけど。



そして現在。

高校生に進級してもボーダーに所属していた。

高校生が仕事をするなら、本来であればアルバイト扱い。

だが、ボーダーという特殊な組織下に位置するため、その規則に則り、正隊員——つまり、ガッツリ働くことが決定したのだ。

働かないと駄目発言をした矢先の出来事である。

最初は抵抗に抵抗を重ねたが、結局は仕事をしている二年間。

職場には慣れたが、いい人、有能、見た目よし、の三拍子が揃った面子の集まりになったボーダーで、平凡だった自分は神様のおかげだとはいえ、かなりのし上がった。

だが、このままでは前世と変わらず社畜に染まってしまう。

戦闘狂になったら終わりだと絶対防衛ラインを設定して、どうすれば仕事をせずにすむか考える最近。

漸く、終点を見つけた。

——戦闘訓練（残業）をしないことだ。

大規模侵攻によって、僕が生活していた孤児院は壊滅した。

子供たちや職員の方々は幸い無事だったが、建て直しは資金が必要だ。国からの援助が支給されたため、以前より楽になったと思うが、そろそろ厄介になるのも気が引ける。

ボーダーで正隊員でいると、普通のバイトをするより多くの給料がでる。

一人暮らしを始めて二年。やはりお金は必要なため、最低限の防衛任務は行う。

学生に配慮されたシフトのみをちきんとすれば、後は自由。

戦闘訓練という名の残業さえ回避すれば、後はのんびり自堕落な生活になる。

ボーダーに所属して二年。

社畜に再度戻ることなく生きていられた自分を褒めながら、戦闘訓練を回避する術その1を実行するため、ある場所にやって来た。

「…失礼します。鬼怒田さん居ます?」

「おお! やつと来たか阿宮!」

来た場所は開発室。

開発支部長である鬼怒田さんがモニターの前で座っており、その奥には予め渡しておいた僕のトリガーが置かれていた。

「…言っていた機能は完成しましたか?」

「ふんつ、徹夜して漸く完成したわい。年上をもっと労らんか」

「…感謝してます」

ホントそれ。

社畜時代は後輩が素知らぬ顔で仕事を残して帰宅するのを見送っていたからずつと目の隈が消えなかった。

今の鬼怒田さんはまさに社畜だった。いや、意外と楽しそうに僕の提案を聞いていたから少し違うかな?

用意していたどら焼きを手土産に渡して、専用のトリガーを受け取る。

「二応、お前さんの提案通りにバイパーの設定を固定化させておいた。旋空弧月を使う要領で発動するぞ」

「…了解です。仮想訓練室の準備は?」

「市街地Aでよからう。狙いはモールモッドにした」

「…それが妥当ですね」

流石鬼怒田さん。仕事が早い。

口はキツイが優秀な上司に感謝しつつ、慣れた手つきでトリガー握る。

「――トリガー起動」

静かに呟くとすぐに身体がトリオン体に変換された。

黒を基調とした服で、上はポリウレームネックパーカーではあるが、動きは阻害されない。

その肩の部分はエンブレムなど着いていなく、空白となっている。

「…孤月で、ですか」

いつもと変わらない服に文句はなかったが、手にしている武器に言葉をつまらせてしまう。

「当たり前だ。西洋風の剣など見たことがないだろ。元からあるトリガーを改造する今回の実験ならまだしも、新しいトリガーの開発は時間がかかりすぎる」

「…まあ気分の問題なんで、大丈夫です」

そう言うと、僕は仮想訓練室に向かった。

真っ白な唯の部屋だった空間だが、鬼怒田さんが操作をするといきなり住宅街へ。あら不思議。

詳しくは知らないが、トリオンは何かと便利である。

見慣れた仮想空間を眺めていると、ハリボテのように動かないモールモッドが現れた。

『強度は最大状態。いつでも始めればいい』

「…了解」

鬼怒田さんに返事をする、改めてモールモッドの目の前に立った。

今回の僕の提案は、とある技を再現することである。

あの日。バムスター相手に『刺し穿つ死翔の槍擬』を声高々に放つたのだが、元々は前世の創作品の中にでてきた技の名前だ。

この世界にはFateシリーズは存在しないため、著作権云々の心配がない。

そして、今現在の身体が幼いため、こういうのに憧れる。

以前は友人がフレンドを増やしたいとのことで始めて、唯一やり込んできたゲーム。

その中のキャラクターの技を、転生して色々と変わった今、再現ができるかもしれない。

初心に帰ったように思えてノリノリである。

「……………」

だが、これも一応は実験だ。

息をついて心を落ち着かせる。

精神を統一して——その真名を叫ぶ。

『約束された——』

孤月の剣先を高々と空に突き上げると、青白いトリオンの粒子が舞い上がる。

ここからが腕の見せ所。

舞い上がったトリオンの粒子。その正体である極小に分裂するようプログラミングされたバイパーが一定量集まり次第、素早く孤月を振り下ろす。

それと同時に、大量のトリオンが放出された。

「——勝利の剣!!」

光の粒子が極太の線となり、約10メートルの距離を覆い尽くす。

狙撃武器であるアイビスを上回る威力。サブである旋空弧月を何重に重ねても追いつかない圧倒的な攻撃範囲。

輝かしいトリオンの奔流が一体のモールモッドに迫り、そして。

「…っ！」

来た！空を翔ける光の柱！

宝具『約束された勝利の剣』を扱うセイバークラスのサーヴァント、アルトリア・ペンドラゴンその人が心震える声で真名を述べた数秒後、

《ゴゴゴ——》と心地よい地鳴りと共に溢れ出るエネルギーの膨大さを語るラストシーン！

風圧でアスファルトは扇形を描くように抉り、焼けて。

周囲の障害物は吹き飛ばされて、建物の一部はヒビが入っており、いつ崩れてもおかしくない状況だった。

その直撃を受けたモールモッドは、強固な甲装部分までも粉々に粉砕されて跡はなにもものこっていない。

うん、やっぱり本物の威力には劣る。

予め予想していた感想を抱きながら達成感に包まれる僕。

孤月を収納したちようどその時に、無線が入った。

『——想像以上の威力じゃったわい。使った感想はないか？』

首を大きく縦にふって、満足そうにしている鬼怒田さんが目に浮かぶ。

確かに、威力はどのトリガーよりも突出して高かった。

でもね、鬼怒田さん。

「…トリオン足りませんね」

『当たり前じゃわい。お前さんの願望とはいえ、余分なトリオンも放

出したんじや。それに、いくらプログラムが補助したとはいえ、バイパーをミリ単位で分割出来る化け物は居らん。あんなのを誰もかしくもぼんぼん撃たれては傍迷惑だろう』

ご尤もな正論です。

結果、『約束された勝利の剣擬』は完成した。

しかし無駄なエフェクトに浪漫を求めたために、トリオンがボーダー内でトップの保有量を持つ僕も一発が限界の遊びトリガーになった。

ふつ、これで模擬戦に誘われてもトリオンなくなったことで免れる。

達成感もあり、完全趣味の実験という仕事。

まさに一石二鳥の完璧な残業回避プランだった。

\*\*\*

実験が終わるとすぐに開発室から出た。

鬼怒田さんはこれから、今回の実験結果を木戸指令に報告しにくいらしい。

膨大なトリオンを消費するが、威力だけはピカイチなので需要があるか検討するみたいだ。

そして、トリオンが枯渇した僕は目的どおり。

模擬戦に誘ってくるボーダーA級部隊に属する三バカに断りを入れ、お茶を飲みながらネット将棋でのんびり過ごそうと企てながら廊下を歩く。

だが、嫌な予感がする。

「見つけたわよ、キョウ!!」

僕の直感は当たる。

何度も聞いた声ができる通り過ぎようとした横の廊下に目を向けられ  
ば――

「…珍しいね、小南。本部にいるなんて」

ボーダー本部ではなく、玉狛支部のA級部隊に所属して、僕より先にボーダーに携わっていた同年代の小南桐絵が、仁王立ちして此方を睨みつけていた。

「珍しいも何も。アンタが何時まで経っても玉狛に来ないから呼びに来たのよ!」

「…ん?」

小南はキレて噛み付く直前のように強気的態度で言うのだが……。  
はて? 玉狛に行く?

「…それ、確か来週だよ?」

「えっ!? ウソでしょ!」

いやホントです。

確かに、来週の日曜日に玉狛に遊びに行く約束はしている。支部長の林藤さんと。のんびり釣りしないかって。

素で間違えたのか、早とちりしたのか、はたまた誰かに騙されたのか。

多分全部が理由だね。

「ウソでしょ……? とりまるが『輝耀先輩が来るからグータラしない方がいいですよ?』って言ったのに……」

小さな声でぼそぼそ呟くけど聞こえてるからね？

それにしても烏丸よ。『輝耀先輩が（来週）来るから——』って、一部抜けてるぞ？

故意だろうけど。

「…小南。もう帰っていい？」

「ちゃんとメイクも——って！ダメよダメ！せっかくアタシが迎えに来たのよ！玉狛で模擬戦するわ！」

ふっ、甘いよ小南。

「…新トリガーの実験でトリオンがなくなった。またの機会にしてね」

「はあ？アンタみたいなトリオンお化けがトリオン全部使い切るの？」

事実を述べたら先程の勢いは何処へやら。

疑心暗鬼な表情で首を傾げる。

「…事実だよ。何なら鬼怒田さんに聞いてきたら？」

「…アンタ、妙にあのタヌキとウマが合うわね」

「…意外と話しやすいからね」

それに感性がどことなく同じだからね。

すると小南は眉間に皺を寄せて、低い声で唸り始めた。

「うう〜！アタシとは話したくないと言うのかー!!」

「…痛い噛み付くな痛い」

何が機嫌を害したのか、いきなり飛びついてきて首元に噛み付かれた。



ちよ、精神的に大人で達観してるけど女性との関わりは小学生以下だから！社畜すぎて女性と縁のない生活だったからホント耐性がな  
いんですよ！

その後、痕が残るほど噛みつかれて解放されたかと思えば玉狛に拉  
致された。

とりあえず、小南。逃げないから腕を抱きしめるようにして連れて  
いくのはやめて。

やあ烏丸。珍しく模擬戦するから今度首を差し上げるように待っ  
てなさい（後に戦闘狂の思想だと気づいて取り消しする。尚、頭グリ  
グリなどはパワハラ云々の記憶が蘇るため無し）

久しぶり陽太郎。今度雷神丸も一緒に昼寝しようね。

そしてレイジさん。夜ご飯ありがとうございました。え？僕が作  
らないか？あはは。カップ麺とコンビニの野菜で十分ですよ。

最後のレイジさんとの会話が発端で、僕が天国と地獄両方に行く事  
となると、僕のサイドエフェクトは言わなかった……………。

模擬戦（木虎） 『無明三段突き』 〈前編〉

僕の感はよく当たる。

転生してからのことだが、その直感僕自身が求めるものについて、そして僕自身にとって不利益が起こる場合に事前に知らせる。

だからこそ、防衛任務も終わったので帰ろうとした入口までの最短ルートを取り消して別の道で行こうと――

「よう輝耀。ぼんち揚げ食う？」

――したその道先回りした男がニヤついた笑みを隠せないで菓子の袋を差し出していた。

「……………何の用ですか迅さん」

「いつにも増して間が空いてるなあ。そんなに俺と会うのが嫌？」

「…僕のサイドエフェクトが言ってます。絶対に面倒事に巻き込まれる、と」

「俺は面倒事はいはいじゃねーよ」

うつそだー。

迅悠一

ボーダー初期から所属している古参の隊員で、貴重なブラックトリガーを使用するS級だ。

自称エリートだが、それは間違いなどでは微塵もない。

迅さんのサイドエフェクトは『未来予知』という、詳しくは知らないが、漫画などで最強部類のキャラが持ちそうな能力だ。

戦闘面では味方であることが頼りになるが、普段なら話は別。

本人は首を横に振るが、この人は残業を好まない僕に面倒事を毎度持ってくるのだ。

「…僕は帰ってだらけたいんですが」  
「おっと、それはもう無理な話だぜ輝耀。何故なら俺が30秒お前を足止めしたからな」

ドヤ顔を見せる迅さん。

いつもの如く言葉巧みに僕を乗せて厄介事に突っ込ませるのに。  
そこで僕は考え事をしてはいけなかったのだ。

「……っ?!まさか……!」

厄介事に突っ込むのではなく、厄介事がやって来ると気づいた時には既に遅かった。

直感が警報を鳴らし、聴覚が遠くから小走りで駆け寄ってくる足音を捉え、視覚が曲がり角から出てきた人物をスローモーションの如く認知し、嗅覚が女子特有の良いにおいを——と、最後のは不必要か。痴漢と同じようになってしまう。

まあ、嗅覚と触覚を除く感覚だけでも、これから起こるだろう状況は悠々と判断できる。

「あっ!そこにいたの輝耀くん!ずっと探してたんだよっ!」

「…要件があったのか?綾辻」

僅かに頬を上気させ、近寄ってくるのはボーダーのオペレーター、綾辻遥だった。

大規模侵攻の際に知り合って早二年。

「まさかもう帰るつもりだったの?言ったじゃん!今日は私が書類書き終わるまで待っていてって」

「…いや、別に——」

「晩御飯作らないよ?」

「――食堂で寝てます」

基本的にずぼらな一人暮らしを行っている僕は、食生活は即席麺かレトルトで終わらせる。

少し前にそれがバレて、なんと綾辻が料理を作るとなったのだ。

前世で女性に全くと言っていいほど関わりがなかった僕が女性を自分の部屋に入れることに抵抗は、前までであった。

だが、最近思う。料理してくれるならいつか、と。

怠惰が色欲に完全に勝り切った瞬間だった。

故に、楽するために料理を作って貰えるなら、少しばかり待つことにする。

……未だにニヤついている迅さんには解せないが。

「…何ですか迅さん。言いたいことがあるなら言ってくださいよ」

「いやー青春だなーって思ってた。お前の未来はいつ見ても面白い。尻に敷かれてしかないけど」

しかもなんか失礼なこと言われた。

これ以上追及しても状況が更に悪くなると直感が論すので無視をする。

綾辻は迅さんの話を聞いてなかったのか、別の話題を話し始めていた。

「食堂だと邪魔になるからうちの隊室来たら?」

「…唯のB級隊員が居座っていいのかい?」

「いやいや。輝耀くんが普通のB級ならA級部隊もB級になるからね?」

えー、そう?

神様のおかげで身体能力が上昇している僕を普通に切ったり撃つ

たりする人達の方がヤバイでしょ。」

確かに食堂に居座っては邪魔なだけなので、今回は綾辻が属するA級部隊の嵐山隊の作戦室にお邪魔することになった。

「輝耀くんはA級に上がりたいなーって思わないの?」

「…固定給料に目を惹かれたけど仕事量増えるのは嫌だ」

「だからって隊に属してないのも流石にやめた方がいいぞ? 忍田さんも上司命令使う直前だったからな」

「…ナチュラルに着いてこないでください迅さん」

「えー。いいじゃんか別に。お前の戦闘見るくらい」

綾辻の質問だが、僕はチームランク戦なる残業をしたくないため部隊を作っていない。

既存の部隊に入るとしても、完成しているチームワークを崩しそうなので、結局僕はどの部隊にも属していない。

フリーなのである。

そんな話に乗ってきた迅さん。綾辻も苦笑いしているが文句を言わないため、付いてくることが確定らしい。

しかし、なんで戦闘?

一休みしていくだけで?

\*\*\*

「輝耀先輩。模擬戦してください」

B級以上の部隊に与えられる完全個人空間の隊室でゆっくりさせてもらおうとした矢先、これである。

既にトリガーを起動させて、真剣な表情で見ってくるのは木虎藍。

嵐山隊のエースだ。

そして、よく僕を模擬戦に誘う一人である。

「…いや、今日は——」

「先輩、今日こそ模擬戦してください」《…いや、今日は色々と予定に予定が、ね?》《じゃあ次、絶対にお願ひします》《…あー、わかったよ。次だね、次》——これを聞いて何かご感想は?」

悲報。後輩が会話を録音していたことについて。

前世で死ぬ前、パワハラやセクハラが職場で問題視されていたため、何かあった時のために携帯が許可されていたのだが……。

信頼されてなかったのね。残念、僕。

「…それを、どうするつもりだ木虎」

「双葉ちゃんや緑川くん辺りに聞かせましょうか。後輩との約束を簡単に破る先輩の姿を」

膝から崩れる僕を得意げに見下す木虎。

やめて、これ以上僕を慕ってくれる後輩の数を減らさないで!

そういうことで、嵐山隊の仮訓練場を用意されたのだが……。

木虎はずっと真面目に戦ってくださいと言うんだが、別に、僕は仕事は最後までこなす。

それは社畜云々関係なく、仕事をする身として当然である。

残業は除くけど。

『先輩。もし手を抜いたら……分かってますよね?』

「…木虎よ。僕が先輩だから下手に言えないが、最近辛辣すぎやしないか?いくら黒江に塩対応されるのに傷ついているからと——」

『傷ついてません』

「…いや、シヨックでフリーズして——」

『ません。お話はもう結構です。首を切られる準備、しててください』

い』

先輩への逆。パワハラを飛び越えて殺人予告とは……。まあ、ボーダーなら事実首が飛ばされることが多々あるので問題発言にはならないけど。

冷たい言葉を受けて若干ショックを受けた僕は通信をオペレーターに変える。

「…綾辻、今日の木虎、不機嫌？」

『うーん。喜んでるんじゃないかな？』

しかし、質問に対する綾辻の回答に更に頭を悩ませる。

ええ、あれの何処が喜んでるんですか……。最近の子はやっぱ違いますね。歳は同じだが人生経験でいえばおじさんの僕にはわかりません。

これがジエネレーションギャップかと一人頷いていると、設備の操作が完了したようだ。

トリガーを起動させてトリオン体に変換させ、転送完了まで目を閉じる。

綾辻の転送完了の合図を聞いて目を開けると、そこは市街地Aの街並みだった。

『それじゃあ、二人とも戦闘開始！』

綾辻の号令と共に、遠くから強く地面を蹴った音が聞こえた。

相手は木虎一人。

直感と聴覚から伝わる情報を頼りに木虎が動く方向を随時目で追いながら、考え事を始めよう。

現在、僕のトリガーは『約束された勝利の剣擬』を使用するトリガーや改造したものが入ってない普通なものだ。

壮大なエフェクトが必要な宝具の展開真似などできない。

本来なら流れる的に『無限アンリミテッドの剣製』でも使いたいんだが、大量の剣を出すだけなら再現可能だが結界を作る手段がない。

だから今回はパスにして、アルトリア顔で誰か良さげな人いないかと、罠を設置しまくっている木虎を眺めながら考えていた。

『何だ輝耀。お前から動かないのか?』

「…まだ居たんですか迅さん」

『ごふっ！他人には平気で言うのかよ』

当たり前じゃないですか。貴方は先輩でも厄介事を僕に与えたんだし。

吐血を吐くように苦渋を洩らす迅さんは——ん？吐血？

「…ちようどいい。アレなら孤月だけで十分だ」

動かない僕を囲うようにして張られたワイヤーのトリガーであるスパイダーがあることを無視して、ある一点のみに集中する。

必要なのは相手を翻弄させる速さと連続で孤月を振るう器用さだ。

出身は同じ日本。

神様からの身体とトリオン体である僕なら——可能だ。

孤月の刃先を目線と同じ方向に向け、両手で柄を握り、刀全体を右肩より上に、地面と平行になるように構える。

「——…一歩音超え」

最初の一步で、遠くを見張るためにいた高めの建物から高速で降りる。

その際にコンクリートが抉れるが気にしない。  
踏み出した足とは反対の足が地面に到達する。



「……二歩無間」

大量に設置されたスパイダーだが、大掛かりな設置ゆえにでてしまった綻びを直感で見つけ、その中に突入する。

その近くにはタイミングを合わせたため、木虎が居た。

しかし、当の本人はいつの間にか僕が建物の屋上から消えていたことに驚き、僕との距離がもう埋められていることに気づいていない。

拳銃を戻して、スコープオンを独自に改良した形態で手にした木虎に向けて口を開く。

「……三歩絶刀！」

ギリギリで声を受け取った木虎の、反応できていない身体より先に、視線が交差する。

反射的にシールドを貼ろうと木虎は動くが、その時には既に僕が三歩目を踏み切っている時だ。

故に守る術は何もない。

そんな木虎に、気分が高揚して必要以上に声を張りながら、幕末にその名を轟かせた真選組一番隊隊長である沖田総司（女性だった）の宝具を叫んだ。

「……『無明むみょう——三段突さんだんづきき』!!」

僕が四歩目を地面に着けた時には、全てを斬っていた。

ほぼ同時に刻まれた斬撃は木虎のトリオン体を瞬く間に切り刻み、周囲のスパイダーすら無残に散り落ちてゆく。

防ぐ以前に、視覚出来なかったことに驚愕を隠せない表情の木虎は青白い光に包まれて緊急離脱ベイルアウットしたようだ。

『いつ、1—0。阿宮 有利です』

たどたどしくカウントを報告する綾辻。

そっか、今回は十本勝負だった。めんどーだなー、結局綾辻がオペレーターするから書類も片付かないし。

ならせつかくだし、もう一個、『無明三段突き擬』が出来たんだからアレもできないかなあ？

\*\*\*

輝耀が次の宝具擬の再現をワクワクしながら考えている中、オペレーション室で二人の試合を見ていた綾辻と迅は未だに硬直したままだった。

「じ、迅さん……輝耀くんって今、グラスホッパーっていれてませんよね……？」

「ああ。孤月とバイパー以外はテキトーに決めてるらしいが、今日は入れてないのは確認している」

「………明らかにグラスホッパーを使ってもできない動きでしたね」

「………そうだな」

グラスホッパーは触れた物体を跳ね返すことが可能なオプショントリガーの一つだ。

A級隊員の攻撃手にもグラスホッパーを使った高速戦闘を行う猛者は多く居る。

A級部隊のオペレーターとして、何度もその使用を見てきた綾辻や、実力派エリート迅。

しかし、その二人でも、先程の動きはグラスホッパーを使った、それ以上の動きに見えていた。

「いつの間にか消えてたら何回か見えて、そして何回も斬ってます、よ



――

C級隊員にも伝わっている情報を思い返すが、まさにボーダー最強だと知らしめている。

……未だにB級なのと模擬戦を全くしないので、何も知らないC級隊員は悪い方向で噂を流しているため、綾辻が録画しているこの戦闘を見せれば黙るだろう。

――もし、C級隊員に出回っている輝耀輝耀に恋する乙女達についての噂があるとある女性達にまで知れ渡ったら、主にそのメンバーの戦闘要員によってC級隊員がトラウマを持って大量にやめてしまう。

そんな未来を阻止するのは、声を漏らしていたことを指摘して真っ赤になる綾辻を弄るのと、輝耀の戦闘を見るために手を回した迅にとっては大収穫である。

しかし、残り九試合ある。

「さあて、木虎ちゃんは何処まで喰らいつくか、だな」

市街地Aに戻った木虎と、アイビスを取り出してまた消した輝耀を見て、迅は楽しそうに暗躍する。

## 模擬戦（木虎）『絶剣・無穹三段』〈後編〉

「…何やら不穏な気配がする」

具体的に言えば、僕の情報を片手にぼんち揚げを食ってる人がニヤついてそう。

僕こと阿宮 輝耀の直感はだいたいあたる。

今までは神様による過保護で身体能力が可笑しくくらいに強化されていると思いついていたが、僕の直感や視覚、聴覚などの感覚の強化は原因が違ったらしい。

サイドエフェクト：全感覚超強化

名前の通り、感覚が常人を超えて強化されるというものらしい。欠点として、痛みなどの感覚も敏感となり、諸刃の剣とも言えるが、トリガー使えば痛みはないのでオールオッケーです。

しかし、このサイドエフェクトはある一点のみを強化したのではなく、複数を強化させるので、風間隊の菊地原くんより聴覚は良くないし、影浦隊隊長のカゲさんより相手の感情に敏感ではない。

所謂、器用貧乏なのだ。輝耀だけに。

…え、まさか僕の名前の由来ってマジで器用貧乏だからなの？

### 閑話休題

僕の名前をつけた亡きこの世界の両親に是非を問いたいところだが、今は模擬戦に集中しよう。

じゃないと後で木虎にドヤされる。絶対に。

まあ、僕も後輩の頼みは昔から結局受けていたからなあ……。

だから新人社員が入社した時は必ず残業した。

悲しいことに、その新人は颯爽と帰ったから。

「…まあ、木虎は熱心だからいいか」

前世の思い出に一人悲しんでいたが、人影を見つけた。  
この後輩はちゃんと残業もとい指導を訊いてくれるから断りにくい。

「次、お願いします」

「…正直に言いに来る必要はないよ?」

「先輩相手に奇襲は無理だと改めて分かりました。だから、正面から行きます」

と、スコープピオンを手に木虎は構える。

その目は僅かな動きでも逃さないという、研ぎ澄まされた集中が見て取れる。

嵐山さんはいい部下を持ったと思う。

前世でこんな後輩がいたら、僕も楽だったかもしれないのに。  
というか、ボーダーの子達はいいい人が多い。

C級隊員達は最近、すぐさま帰る僕をヒソヒソと馬鹿にしているが。

「…おっと、っと」

「逃しませんっ」

考え事をしていた僕に、木虎が片手でハンドガンをとり、近距離ゆえ正確に脚を狙って撃ってきた。

シールドを入れてないので、横にステップして避けるも、ワントンポ早く移動を開始していた木虎に正面を抑えられた。

そのまま横薙ぎにスコープピオンを振るわれる。

足の軸がぶれないようにしやがみこみ、その一撃を避ける序に腰にさしておいた孤月の柄を握って抜刀の準備をする。

「…シッ!」

先程、横にスコープオンを振るつたため、体幹のバランスをほんの少し崩した一瞬に狙いを定め、抜刀。

慌ててシールドを展開した木虎だが、読みを外してシールドの中心でガードができず、端の部分が斬られた残骸と共に、回避が間に合わなかった木虎の右手が飛ばされ、目の前を横切る。

その手はスコープオンを持っていたため、主力武器を離すこととなった木虎は苦い顔をしていた。

「…降参かい？」

「まだですっ！」

しかし、木虎は止まらなかった。

地面に向けてハンドガンの照準を合わせ、引き金を引く。

屋上の床に弾が当たるとそのまま爆発した。

おそらくメテオラを使ったのだろう。

地面に亀裂が入るとすぐに、屋上が崩壊した。瓦礫とともに下に着く。

建物内に入ってしまった、瓦礫が崩れたことで土煙が辺りに充満する。未だに降ってくる邪魔な瓦礫を粉碎させながら辺りを見渡すも、何も見えない。

視界は最悪だが、これで僕の動きは阻害された訳ではない。

「…右上。1メートル先」

建物内のため場所は狭いが、その分サイドエフェクトが役に立つ。

聴覚と直感を使い、正確に木虎の位置を把握して、今度はこちら側から攻撃を開始する。

「…バイパー」

孤月を持っていない掌に、少し大きな立方体を出し、4×4×4に分割したバイパーが煙ごと壁を通過する。

煙は少々晴れたが、手応えがない。

つまり、木虎は回避に成功したようだ。

シールドを使ったなら63のバイパーが壁と衝突することはない。

木虎の動きから、グラスホッパーで緊急回避するしか手がない。

そう思った直後、直感が働いた。

「――お返しですっ」

大声ではないにしろ、決着をつけるべく覚悟を決めた声が後ろから聞こえた。

グラスホッパーの機動力を駆使して、直前まで気付かれずに背後をとった木虎は、失った手の部分をスコピオンで補い刃を突きつけようとしていた。

それに反応できている。

全力で孤月を振るえばギリギリ刃は届かないが、判断を見誤った。

「…スパイダーか」

元々この室内は一回戦目で木虎が罠を張った場所だ。

瓦礫の崩壊によっていくつかのスパイダーは機能を失っているが、僕を囲うように張られていたそれに意識を奪われた。

おそらく僕が視覚で周りを呑気に確認している間に仕掛けたのだろう。

流石の判断力と上手い配置だった。

感心している僕だが、もうスパイダーを無理矢理斬っても木虎のスコピオンの方が早く到着する。

斬ったら、だが。

「――!? なっ、バイパーっ!?」



自由に弾道を定められるバイパー。  
僕は壁に向かって放った64に分割したその一つを他とは異なる動きに合わせていた。

背中を僅かに突いただけとなってしまうたスコーピオンに向けて。

「ほんと、厄介なサイドエフェクトですねっ！」

「…僕もそう思う」

今の一撃は直感が手助けしてなかったら確かに危なかった。

いや、僕が感心とかしななければ間に合ったりしてるんだけどね？

スコーピオンがまたしても飛ばされた木虎はグラスホッパーを使い、僕が空けた壁から出た。

しかし、ここで決着をつけようか。

アレを使うのにいい位置だし。

「……塵刹を穿つ。無辺の光を持って、天命を断つ」

この技を初めて見た時はホント驚いた。

Fateシリーズでは沖田総司が好きで僕だが、そのオルタ、魔神セイバーが出てきた時は思わず二度見した。

設定は何かごちゃごちゃしていて理解できてなかったが、宝具を発動させたアクションが物凄くカッコよかったのが印象的だ。

そして、沖田総司と魔神セイバーの技は擬を作りやすい。

特に、魔神セイバーの技はオールラウンダーの僕には最後まで再現可能だ。

外に出て、姿勢を低くしていた木虎は腰に孤月を戻した僕を見て警戒を高めている。

しかし、その孤月を抜き、枕詞と共に一步を踏み出した時には、既に木虎の目の前で刃先を向けていた。

『無明三段突き』擬もだが、ちゃんとした剣術を習っていない僕は突きの技を早くできない。

そのため何度も斬る。

無造作に斬るのだが――

「――良かった。同じ場所で」

おそらく残り少ないトリオンを使つて、的確にシールドを貼つて生存したのだろう。両足は切断され、深い切り傷が腹部に見られるが、ベイルアウトはしていない。

体勢を低くしていたため、狙われる場所は狭まり、そして一度見ている技だから何となく狙われる場所はわかる、と。

……うわあ、才能の塊じゃん。

一回で見切られるとは思わなかった。

やはりA級なだけある。下手したら負けそうだ。

現に、背中を向けている僕に、どうにか防いだ片手に持つハンドガンを向けている。

しかしだね、木虎。

僕は宝具の名前を最後まで言っていないよ。

背中は向けたまま。

孤月の変わりに取り出したアイビスの銃口と視線だけを後ろにして、呟いた。

「……『ぜっけん絶剣・むきゆうさんだん無穹三段』」

ボーダー内トップのトリオン量を誇る僕がアイビスを引くかどうか？

答え、一人余裕で包み込むビーム光線となる。

「…剣からビームだせないかな」

『……………2—0 阿宮 有利です』

勿論、ガードする術がない木虎はベイルアウトした。すつきりした表情を浮かべながら、これからの宝具擬の再現についての案を考えるのであった。

\*\*\*

木虎との対戦はこの二回で終わった。

なんでも『何か掴めたんで一人で練習します』とか。

木虎が満足したならそれでいっか。

悪い方向にならないと僕のサイドエフェクトが言っている。

それが口癖の自称エリートはいつの間にかいなくなってたんで話題に出さなくて良さそうだ。

そして、嵐山隊作戦室に来た本来の目的である綾辻を待つことは、模擬戦のため長引いた。

慌てて作業する綾辻を見てられなくて少し手伝った。

めっちゃ驚かれた。そして効率がいいって。

そりゃ、元社畜なので事務作業は慣れてますからね。もう社畜にはならないけど。

……………あれ？今日働きすぎじゃない？社畜じゃね？

社畜とは何か。働きすぎではないかと綾辻が晩御飯を作ってくれる間、ひたすら考えた。

すると、すぐに料理が運ばれてきた。

思わずエプロン姿の綾辻を凝視したが、ハツとしてすぐに視線を逸らす。セクハラ扱いされる前に。

視線を逸らして料理を見たが、美味しそうなハンバーグを中心に何

品が料理が並べられた。

前世からだがまともに料理をしないので、自室のテーブルに美味しそうな料理が並んだことに感嘆の声漏れた。

召し上がれ、と笑顔で言った綾辻。

遠慮なく口に運ぶため箸を手に取ったが、何故か僕のサイドエフェクトが働く。

やめとけ、死ぬぞ、と。

……全身から汗が流れた。

ここまでの具体的に直感が働いたのは初めてだ。

しかし綾辻の「レイジさんが輝耀くん自炊してないって訊いて：頑張って練習したんだ♪」とわくわくした視線が選択肢を一択にした。

だいじょーぶ。僕の身体は神様のおかげで頑丈だ！

こんがり焼けたハンバーグを一口サイズに分けて口に運んだ。

「……………（死ーん）」

「どーかな？ 試食してくれたお父さんは涙目で美味しいって言ってたけど……って！ どうしたの輝耀くん！ しっかりしてっ！」

綾辻のお父さんに合掌して、僕は意識を手放した。

初めての女子の手料理。天国に行ったが一瞬で地獄に直行したよ……。

その後、他のボーダー女子組により綾辻が料理する時は監視がつくようになった。

『訴状の矢文』は超有能。そして――

「…なんか視線を感じる」

みなさんどうもお久しぶりです。阿宮 輝耀です。

綾辻の料理の襲撃を受けてから早数ヶ月。

罪悪感で涙を流した綾辻をなんとか慰め、何故か僕の奢りで今度飯を食べに行くことになった。

前世同様、無趣味の僕はFate技を模倣する案を黙々と思考するだけが日課なので資金はそこそこ残っている。B級だがネイバー討伐数は断トツで多いのでそこで稼いでるのだ。

多めの軍資金を持って昨日、僕自身も少々興味があつた少し高めの店に綾辻を連れていったのだが、翌日にはその情報が拡散されてた。

そして、直感が告げた。

――槍を殺せ、と。

シフトが入っていないにも関わらず、珍しくボーダーに足を運んだ僕はこれまた珍しく、模擬戦で散々槍バカのポイントを徴収してきた。

その時のざわめくボーダー隊員の視線かと最初は思っていたが、ボーダーを出てから数十分は視線を感じる。

不意打ちに視線の方向を見るが、人影などやはり皆無だったのだ。

少々不気味に感じるが、いざとなればトリガー使って逃げればいい。

そう思っている時だった。

「…っ！………ネイバーの反応？」

僕のサイドエフェクトが警告した後すぐに警告のアラームが町中に響き渡る。

勿論、今僕がいるのは危険区域ではない。一般人が数多く生活している住宅街だ。

現在進行形で、老若男女皆が避難を始めている。

「…休日出勤なんて絶対にしないと決めてたがやむを得ない」

文句を言いながらも、緊急事態なのでトリガーを使用する。

トリオン体に変換されると、周りの人もボーダー隊員だと理解し、悲鳴が僅かだが収まった。

そうもしている間にゲートは開く。その近くに人が居ないことが直感でわかると、簡単にだが避難者に指示をだす。

「…今回の事態は改めてボーダー側から報告があります。今は避難を開始してください」

この近くで店を経営しているのだろう大人の男性にそう伝え、他の避難者を誘導してもらう。

「…こちら阿宮。市街地にネイバーと遭遇。これより対処を——ッ  
!？」

『またイレギュラーのゲートか。阿宮、隊員の中で一番近いのは君だ。避難を指示しつつ撃破を……どうかしたのか?』

人がいなくなったことを改めて確認して本部に連絡を入れ始めたその時、強烈な視線が突き刺さる。

まるで——

「…某序盤で手に入るヤンデレバーサーカーの視線だ」

まあ、実際はそんな視線貰ったことないけど。

『バーサーカー?何を言ってるんだ。そんな事より、異常はないのか?』

「…少しぼーっとしてました。すみません忍田さん。異常は…見たこともないネイバーだということくらいしかありませんね」  
『それは完全な異常だ!』

通信が繋がっていた忍田本部長の呆れた声が耳に入る。

確かに、なんか大きめの魚みたいな新種のネイバーは未知数の相手だ。

普通なら慌てる事態だがここに居るのは元社畜。予想外のイレギュラーなんてなんのその。いつも通り対応してあげましょう!

「…幸い危険区域に近いですので、そこに誘導して情報を収集して撃破します」

『阿宮なら可能か…。わかった頼んだぞ。念の為、回収班と非番の隊員を向かわせる』

「…その前には終わらせませす」

後処理をするのは面倒だから。

「…バイパー」

なんか爆弾?的な何かを落とそうとしていた魚ネイバーだが、その全てをバイパーで迎え撃つ。

書類を早く完成させるために磨いたパソコンのキーボード早打ちの如く正確無比の打ち漏らしの無さ。

衝突した爆風で民家の窓ガラスが割れてしまったが、後で上に直談判してくれ。

「…さて。こっちだ不味そうな魚」

実際、見た目からしてこの魚は不味そう。いや、食べないよ?あくまで見た目ね?

ついでに、最初のバイパーの残りを本体にぶつけたのだがカスリすらしない。

鱗が硬すぎるとか、絶対中身も硬いだろ。

あつ、2度目だけど食べないからね？

わかりやすくバイパーで誘導して数分。

危険区域内に追い込んだ魚ネイバーとやつと正面からご対面だ。

「…今回は近接系トリガーも趣m——実験用トリガーもないから普通に倒すか」

だが、槍バカが泣いたエグい攻撃<sup>宝具</sup>でな。

「…アステロイド」

まずは小手試しのバイパーより威力が高い通常弾を使う。

対象がデカいだけに確実に当たるのだが、威力が足りない。装甲がかなり厚いようだ。

「…これはどうだ？アステロイド×アステロイド＝ギムレット」

弾バカに合成弾の作り方は教わったので四つの徹甲弾を瞬時に作り出す。

そして魚ネイバーの真下に移動して、装甲が一番分薄いだろう場所に撃ち込んだ。

「…ギムレットなら十分だな」

トリオン量が多い僕が四分割したギムレットは魚ネイバーの装甲を突き破り、巨大な身体と比べると微塵ではあるが風穴が四つ空いた。



「…これで倒れないか。では、弱点だと思う目を……ん？あれ？歯？」

身体に穴が空いたネイバーは空中で方向転換する。

ネイバーの弱点である目のような器官が真正面にくるので、槍バカにした攻撃をしようと思ったがやめた。拍子抜けだと思って。

しかしどうだろう。

魚ネイバーは口元を頑丈に閉じて、今までは地上に降りようとしなかったが僕目がけてまっすぐに突っ込んで来た。

「…爆撃型だと思ったが、自爆機能付きか。他の隊員だと相性によっては何人か必要だろうな」

射手ならギムレットを使えばいい（結構ムズい）が、孤月やアイビスで貫通できるかまだ分からない。

太刀川さんや二宮さんなどの高火力を誇る御方なら楽だろうが、火力不足なら手こずるだろう。

だが、僕は手こずらない。

これ以上長引かせるのは効率が悪いし、めんどーだし。だから、

「… 我が弓と矢を以って太陽神（アポロン）と月女神（アルテミス）の加護を願い奉る

この災厄を捧がん——」

Fate/Apocryphaに登場して赤のアーチャーとして活躍した、妙に人気な（自分もお気に入りだった）サーヴァントの宝具を模倣しよう。

迫り来る魚ネイバーに目をくれず、片手に大きめのキューブを出現させる。

勿論、バカ正直にギムレットで無理矢理強行突破するのではない。

バイパー×メテオラストマホーク

何度も分割させ、大きな塊として遙か上空に一度、トマホークを浮かばせて、

「――『ポイボス・カタストロフエ訴状の矢文』」

設定したように、流星となったトマホークの雨が魚ネイバーの背に降り注ぐ。

ぶつかった衝撃で大量の爆発が起こり、巨体を蝕んでいく。

勿論、ギムレットでも防げなかった装甲が幾度と続くトマホークの雨に抵抗できるわけはなく、垂直に落下していった。

「……これ、かなり使えるな」

米屋も言っていた。たとえ避けても周りで爆発が起こりまくって何発もトマホークの雨が降ったら防ぎようないって。

流石、最大補足レンジが100人の大軍宝具。これからも重宝しよう。

後に、後輩の黒江に使ったら泣かれた。模擬戦では封印しよう。

\*\*\*

謎の魚ネイバー襲撃から数時間。

結局、報告書を書かされて優雅な休日が殆ど消えたのだった。

忍田本部長。手抜きしないんで隣で書かせないで欲しい。

えっ？作戦室ないからだろって？

だってランク戦とか面倒だしなー、お金ならB級雇用だけで十分だし。

長い拘束から解放された僕は、今日は一人外食しようと三門市を探

索中だ。

「…はて、今日は何を食べようか」

『昨晩はイタリアンのパスタだったのでえ、今晚はお好み焼きはどうですかあ？お昼は色々あつたのでえあまり食べられていないでしよお？』

「…確かに。ガッツリ食べた気分だ。影さんの店に寄って帰ろっかな」

『あつてもお、食べすぎはダメですよお？最近野菜を摂取してないのでえ』

「…明日の朝食はサラダにしようか。朝食食べる気力はないし」

『ダメですよおますたあ。ちゃんと食べないとお、ブラックトリガーの私と違つてえ倒れちやいますよお？』

「…小腹が減った時に食べれば平気だろ。一応、健康については考え……て……る……誰？」

スムーズに進む会話に、相手が誰なのか確認していなかった。

聞いたことのない声は甘ったるく、今気づいたが身震いする不気味な女の声だった。

恐る恐る、僕は声のした後ろに振り向くと――

『やくつとお、見てくれましたねえ？はじめましてえ。私は ダイヤ

”。ちよつと不思議なブラックトリガーでえすう』

輪っかの中に銀色の五芒星。左右には翼があるちよつと所ではなほほど不思議な物体が浮いていた。

『早速ですけどお

“僕と契約して、魔法少女になってよ” お？』

色々ツツコミたいところがあるが先ずはこれ。

——何処か次元間違つてない？

既に「ますたあ」呼びとか、本当にブラックトリガーなのかとか、  
なんで喋るんだとか聞きたいことは山ほどだが真つ先に思い浮か  
んだのがこれだ。

一人称を僕にしたのに、最後に疑問形にしたのは謎だが。

『熾天覆う七つの円環』なかつたらドジで死んでたね  
(確信)

「…何故に『魔法少女』なんだ」

「何故でしょうかあ？運命い？宿命い？とにかくう、言うのが筋というものですよおー」

僕の周りをフヨフヨと浮かぶ物体が徐々に近づいてくる。

そして、こう、ねつとりとした視線を向けてきながら。

「…それで、お前は何なんだ」

「あらあ、忘れましたあ？言つたじゃないですかましたあ。私はダイヤ。ブラックトリガーですよお？」

「…意志を持つブラックトリガーなんて聞いたことが無い。それに、そんなトリガーを僕達は知らない」

ボーダーが所有しているブラックトリガーは二つ。

一つは迅さんが、そして天羽が持っている。

あの問題児の天羽ですら、ボーダー内では情報が出回っているのだ。故に、ボーダーにブラックトリガーがもう一つあることなど決してない。

だから、一番の可能性として、

「…近<sup>ネイバー</sup>界のブラックトリガー」

何時、侵入したのか分からない。

しかしながら、近界のブラックトリガーであることは間違いないと断定できる。

ダイヤと名乗ったブラックトリガーから瞬時に距離をとり、戦闘態勢に至った。勿論、片手にはいつでもトリガーを起動できる。

「酷いですうますたあ。私は折角貴方のためにやって来たのに」

「…おい。どういう意味だ」

「文字通り、私は貴方に出会うためにあの世界ネイバーフツドからやって来たのですよお。阿宮輝耀さん？」

……………怪しすぎる。

何故、僕の名前を…………いや、今日一日は監視されていたのだ。分かるのも理解出来る。

だが、僕の元に来たという理由が不明だ。

「…話すつもりは無い、ということか」

「もちろんですよお。今はこんな無機物からだですがあ、元々乙女なのですからあ。乙女に秘密は多いんですよ？」

元々が乙女。ね。

「…では、いくつか質問する。それで君への対応を決めさせてもらう」

「まああ。〝お前〝から〝君〝に変えてくれましたねえ。行く行くは〝はにー〝になるのでしようかあ」

いや、多分ない。だから早く質問に答えて欲しい。

日も暮れた時間帯。傍から見たら変な独り言を話す痛いヤツなのだ。

つてか、早く帰りたい。

「……………もお。すこしジョークを言っただけですのにい」

「…ジョークの割には本気の声色だったぞ。手短に尋ねる。何故、ブラックトリガーなのに意志がある」

「そうですねえ。本当なら乙女の秘密、と言いたいのですがあ…………許しませんよねえ？」

「…当たり前だ」

「でもでもお。ブラックトリガーたる私が<sup>ミデン</sup>玄界にやって来た理由って一つしか無くないですかあ？」

僕のサイドエフェクトにより嘘を吐いた場合は直感で是非は何となく分かる。

自称ブラックトリガーに通用するか不明だったが、杞憂のようだ。リングの中にある七芒星の中心部。

その奥底から、プレッシャーが全身を貫くように放たれた。

「——アイツら、<sup>わたし</sup>人の事を散々踏みにじってくれたんです。燃やし尽くさなければ道理ではありませんよね？」

直感が働く前に、僕は異界のブラックトリガーの手？羽？を握っていた。

…アレだ。お偉いさんと会うと目を合わせる前にお辞儀して握手を求めるようなものだ。

あまりのプレッシャーに、身体が強化されたが中身は社畜心の僕は咄嗟の判断で面倒事に足を踏み入れたのだった。

\*\*\*

『…ひとまず、君の処遇については僕が受け持つ。だけど、決して他の連中に見つからないように』

自称ブラックトリガーの手を<sup>羽</sup>反射的にとつただけとは言え、面倒事であることに変わりない。

一度、本部に戻るため道を引き返そうと慎重に人の視線を気にしている最中だ。

「もおうつ。ますたあ、私のことはダイヤって呼んでくださいよお。

前に「愛しの」って付けてくだされば幸いなのですがあ？」

「…呼ばない。あと、肌を必要以上に触るな」

「やあーですう」

目立たせないためにパーカーのフードの中に身を潜めるダイヤだが、先程から首元を羽で触ってくるので鬱陶しくて仕方がない。

叱っても尚態度を改めないダイヤにより、歩幅が自然と大きくなる僕だった。

しかし、ふと歩みを止めた。

「…珍しいですね。ボーダー本部以外で会うなんて」

「そうだな。しかしまあ、今回は俺から会いに来たもんだから偶然じゃないぞ？」

「…知ってますよ、迅さん」

数年前に破壊された民家のブロック塀。そこに背中を預けていた迅さんが、僕を見つけると進路を防ぐようにして立ちはだかった。

「…何か面白い未来でも見えました？」

「お前が胃薬を購入する未来が現実になったって言うのは面白いかな？」

「…薬を服用できる暇があるなら十分薬ですね」

「あれ？俺の予想と違うな、そこだけ」

何を言う。元社畜の僕にとって薬など最早意味が無い。

入社してすぐに大量のエネルギードリンクや胃薬を吸収した結果、身体が順応して効果がみられなくなったからね！人間の身体って凄い。

あと、純粋に薬飲む時間があるなら寝てるか資料の整理をしていた。

「…それで、いつになったら本題に入れるんですか？早くコレについ



て報告して帰って寝たいです」

「ああ、酷いですますたあ。私をコレ扱いなんてえ。——モ  
ノ扱いも少しばかりいいですけどお」

最後のセリフを無視して、フードの中から取り出したダイヤを見せ  
る。

頼むから熱を籠らせて身震いしないでくれ。それは僕の胃に効く。

「ほおー。それがお前のブラックトリガーか」

「：やっぱり未来予知してたんですね。じゃあ、僕を止める理由はな  
んですか？どうせ本部に連絡しますよ」

「本人の同意もしてますう」

歩いている最中に話したが、僕がブラックトリガーとしてダイヤを  
使うなら後はお任せしますと本人から言われている。

一体何が狙いなのか。僕一人では捌けない案件故、上層部に事の詳  
細を伝えようとしたが、そこで迅さんが待ったをかける。

つまり、

「：城戸司令相手に切り札でも必要なんですか？」

「流石阿宮だ。俺はいい部下を持ったよホントに」

そうですね。僕も生前欲しかったですよ、ちゃんと働いてある程度  
こちらの意図を汲み取ってくれる後輩が。

『新人なんで』を二年間も使われるとは思いましなかったよ。きつ  
ちり定時に帰ってくれたおかげで僕の仕事量は倍増。後輩がミスを  
したら僕の責任となり、いい成績をだしたら独り占め。

最終的に僕より立場上になってたけど、何もできてないが大丈夫  
だったのだろうか？

……いや、もう社畜時代の僕は死んだのだ。余計な心配はしてい  
られない。

「…迅さんは僕にどう動いて欲しいんですか？納得できる内容なら僕もカバーしますよ」

「そう言ってもなー。どっちかって言うと、保険なんだよ、俺の」

保険？

「あー、お前と、後そこのブラックトリガーちゃんには説明してもいいか」

「私のことはダイヤちゃん構いませんよお？」

「おっ、そうか。んじゃあダイヤちゃんって呼ぶが、彼女は将来必ずお前に必要な存在になる。つまり信用に値するって言うのを俺が保証するんだが……その情報を教えたってことで俺に従ってくんね？」

迅さんがそう懇願してくる。が、答えは別にどちらでもいい。

本来なら上層部で信憑性を確かめたかったが、予知のできる迅さんが保証するのだ。迂闊に情報を漏らしても安心な味方なのだろう。

「…わかりました。但し、貸一つですよ」

「そりや了解だ。むしろ、俺に貸しがないと困ることが近い未来にやって来るぜ——」

——俺のサイドエフェクトがそう言っている。

いつもの決めゼリフを悠々と出すのかと思った。

しかし、【風刃】を起動させている迅さんが構えの姿勢になったことで否と認識した。

「——それと、どうせなら貸二つにしとけ」

悪意のない視線だった。

ホントに悪意が籠っていないので、迅さんが言うように貸しを二つ

作って置いた方がこちらの身にいいのだろう。

それでも、風刃を使った攻撃を行う迅さんに呆れながら避けようとして……

あ、トリオン体じゃねえ。

言わずともトリオン体と普通の体では能力に大きな差が出る。

トリオン体になっていたと勘違いしていた僕は余裕を持って回避できるような神経に伝達をしたが、これだと間に合わない。

かと言って、そこそこの近距離で放たれた風刃の刃は既に目の前に。トリガーを今から作動しても間に合わない。

——あ、つんだなこれ。

やっちゃったーと思いつつながらせめて片腕だけをスケープゴートにしようと思死に身体を動かそうとしたその時だ。

「トリガーの起動を承認、プリズムトランス多元転身いきますう。コンパクトフルオーブンですよ」

光る刃のラインと僕の間に入り込んだダイヤモンドがそう言うのと、もうすっかり慣れたトリオン体へ身体が変換されるのがわかる。

肌に伝わる服の違和感が気がかりだが、頭の中に入ってくるブラックトリガーダイヤの扱いの方に意識が偏った。

これって……まさか………！

「……【熾ロー天覆アう七つの円環ア】」

眩きとともに、犠牲にしようとした右手から真紅の蕾が出てきた。瞬く間にそれは広がり、光の盾が花弁のように展開されていく。

Fate 作品における重要な英霊エミヤが持つ結界宝具にして最強の防具。

かのギリシャ神話のトロイア戦争において、英雄ヘクトールの投擲を防いだアイアスの盾だ。

やってみないと鬼怒田さんに説明して頭を悩ませていた幻想的な

暖色の光による花卉が、いとも簡単に再現されていた。

風刃の刃など既にアイアスの盾により消滅したが、しばらくの間、僕は盾を見て物思いにふけていた。

「ハハッ。予知していた以上の能力だな」

「当たり前ですよお。またあが設計イメージした図面を私が構築完成させた、まさに共同作業による能力ですからあ」

僕の周りを飛びながら、ダイヤはさぞ楽しそうに冷や汗を流す迅さを見下す。

「ブラックトリガー私は使用者のイメージを汲み取り、トリオンを用いることであらゆるものを生み出せるのでえ」

強すぎるブラックトリガーだった。

一つあれば劣勢の国でも逆転に押し返せると言われるブラックトリガーだが、ダイヤはその中でも上の性能をいく。

それでも、僕は

試したい宝具のリストアップをするので精一杯だった。

## 究極の選択 先輩？後輩？

ボク、三門市の輝耀。

相棒（数日前から）のダイヤと一緒にホワイトライフ目指して日々バトルアンドゲット（連行）している元社畜の転生者だぜ！

まあ、その相棒は肩に乗ることなく自宅でこっちの常識を勉強中だが。

「あーあ、味方全滅しちゃった」

「相性が悪かったんですね。マルチでします？」

「おねがーい。輝耀くんもいい？」

「…火力なら任せてください」

既にロードに入った画面を二人に見せる。そこには赤と紫で構成された某ポケットでモンスターが小さくドットで映っていた。

そう、僕は今、どんな世界でも共通して存在する有名ゲームをしている。

え？3〇Sじゃない？時間軸がおかしい？

細かいことを気にしすぎたら部下のミスに気づいて修正作業という地獄を見るぞ。しかも一人で。

——そう思うと今の職…生活費を稼ぐための自主活動場はかなりホワイトだ。

職場先の部屋は改造可の私室同然なのだから。

まあ、貰えるのはB級部隊以上で、個人の僕には与えられない。だからと言って、メンドーなランク戦をしないといけないから部隊に入るなど考えない。

それに、今のように気安な所に遊びに行けばいいのだから。

「あ、メ〇モンがピ〇シーに変身しやがった」

「…なん…だど…っ！5Vこだわりメガネ持ちム〇ンダイナの

『ダイヤモンドスほう』が効かない……!?』

「フェアリータイプ持つてるからね、輝耀くんはもうボタン連打するだけでいいよ」

「ふっ、運が悪かったな輝耀。俺のストリ○ダーで終わらせてやるぜ！」

「…国近さん、弾バカにカ○ゴンの『ギガインパクト』を——」

「——今厳選中だから早く終わらせるよ」

笑ってる出水許すまじ。

あ、笑いすぎて指示出すの遅れて国近さんに睨まれてやがる。ざまあ。

「輝耀くん、連打」

あ、はい。すみません。

この後めちやくちや厳選手伝った。

やっぱどんな世代にもポ○モンは楽しいわ。

\*\*\*

「いやー二人のおかげで6V出たよー」

A級一位太刀川隊に遊びに来たはずが、数時間拘束されて画面と睨めっこしてしまった。

ご機嫌な太刀川隊オペレーターの国近さんとは一転して、弾バカこと出水と僕は憔悴しきって乱雑に物が置かれた隊室に寝転ぶ。お、高級そうなお菓子発見。唯我くんのかな？

三人で見つけたお菓子を食べているとようやく落ち着いた時間となった。

「そう言えば、輝耀おまえ新型トリオン兵とバトったんだろ？手応えどうだったんだ？」

「…飛行型だからアタッカーが不利だね。旋空弧月使えばいけるけど下手にダメージ残ったら硬くなった。多分、自爆モードだと思う」

「見た目魚らしいし、まさに魚雷だねー」

「…無駄にデカイ魚雷だから面倒だった」

「で？それをどうやったんだ？」

「…大量のトマホークでボッコボコにした」

「えつぐ！シューターですらそんなトリオンの消費はしないぜ」

「…ふ、トリオン減つても孤月使えばいい」

「流石オールラウンダー」

国近さんから褒められた。

褒められるっていいよね！以前のブラック企業勤務時は怒鳴られてばかりだったもん！

「…結論、あのトリオン兵は特に問題はない。高火力の攻撃手段がないならA級でも苦戦するかもしれないけど、太刀川さんあたりなら一撃で真つ二つ可だね」

「輝耀くんは？」

「…もちろん可能」

「おー、流石個人一位」

国近さんから褒められた。

褒められるっていいよね！以前の（以下略）

「…今更話変えるけど、隊長さんは何処へ？」

「あーそれねー」

「風間さんと大学のレポート書いてるよ。しかも、城戸司令の部屋で」

太刀川さん……あんだ、そこまで警戒されちゃお終いですよ。

そして同じ隊の後輩には全く心配されてない様子で、それよりも、

「ん〜っ!」

「…あの、国近さん?」

「あとちよつと〜っ」

「…お茶、取りますんで。膝の上に乗らないでください」

「もーすこし〜っ」

僕と国近さんは出水と向かい合う位置で座っていて、国近さんは左手にいた。で、彼女の飲み物が僕の右手にあり、座ったままの国近さんがそれを取るには体を横に伸ばす必要がある。

障害物としての僕がいるため、国近さんの動かないのにほっそりとした腹部が僕の膝に乗っててててて

「ふー、お茶ゲットだぜ!」

「柚<sup>ゆ</sup>宇さん、輝耀がフリーズしてますよ」

「んー?おーホントだ。なにになに?おねーさんに密着されて嬉しかったの?」

国近さんの慈悲深い目が僕を襲う。

きよう は めのまえがまつしろになった

気がついたら自宅に…:…なんてあるはずもなく、何故か頭を撫でられている。もちろん、国近さんに。

なにこれご褒美?今からでも解雇処分されちゃうの?

出水(彼女ナシ)からの殺意を含む視線を無視して、僕(彼女ナシ)は国近さんの手をそつと動かす。

「…あの、ご勘弁を」

「遠慮しないでおねーさんに任せなさい」



ものつそい笑顔で拒否られたですはい。  
ああ、こんな先輩が前世にいてくれたら――

「何をしているのですか、国近先輩」

国近さんが放つおねーさんオーラに押されていると、ふと扉からこの場にいた三人以外の声が聞こえた。

「…双葉、どうしてここに?」

「師匠を探していたら太刀川隊の隊室にいと聞いたので。それで、何をしているのですか、国近先輩」

やって来てすぐにハイライト先輩が逃げ去った後輩の黒江双葉が仁王立ちしていた。

冷えきった視線は僕の頭、つまり国近さんの手を捉えていた。

ヤヴァイ。僕のサイドエフェクトがそう言っている。いや、なくてもわかる。それくらいやべー。

僕が若手の時（既に社畜）にした最大のミスを見つけてしまった背筋の凍り具合と同じだ。

「それで、何をしているのですか、国近先輩」

「…エンドレスなループやめてくれ。国近さん、僕にも説明を」

「んー? 輝耀くんが照れて可愛かったから撫でてるだけだよ?」

「だけ」で撫でないでください心臓に悪いです。

「…………私の師匠が嫌がってます」

「そーかな? 嬉しそうにしてるけど?」

いえ、いつもの無表情です。

「それより、輝耀くんさ。なんで双葉ちゃんは下の名前で呼んでるのかな？前から聞きたかったんだー」

あの、国近さん？目が、目のハイライト先輩が……

「私は師匠の弟子で後輩です。名前で呼ばれて当然かと——私も嬉しいですし——」

最後の方はぼそつと呟いたようだが、僕のサイドエフェクトが言っている。

何この後輩めっちゃ天使

キヨウ は めのまえがまつしろになった

気がついたら自宅に……いるはずもなく、何故か双葉から手を掴まれてマッサージされている。

「…何してる双葉」

「お疲れの師匠にマッサージです。師匠の手、大きくてごっごっつしてますね」

普段滅多に見ない双葉の笑顔。きゆうしよにあたった！

「輝耀くんはおねーさんのなでなでがいいよね？」

「師匠は私のマッサージの方がいいですよね？」

き、究極の二択じゃないか！

まるで剣か盾を店前で選ぶ、いやそれ以上の難易度！

職場の先輩と後輩がいい人なのは前世の夢だったのだ。逆に言えばそんな人達皆無だったのだが……。

「手先震えてるけど寒いのおねーさんが抱きしめて温めてあげよー」

「師匠、汗をかいてますよ。背中が私が拭きますから、その、上を脱いでもらっても……」

なんでき。

## 高所恐怖症になる 『壇ノ浦・八艘跳』

最近、僕は自分が変化しているとよく実感する。  
特に趣味について。

これまで無趣味な面白みの欠けらも無い男だと心の中で公言しているが、果たしてそうだろうか。

勧められたとはいえ始めたFGOは、気がつけば配信されたストーリー及びイベントはクリアしていた。しっかりキャラ育成も行い、シナリオまで読んでいた。

果たしてこれは趣味だろうか？

僕にとつては暇つぶしだったが、今は宝具の模倣をすることを楽しみにしている。楽しみにしていることは趣味なのか？いや、そもそもこれはボーダーの活動中の延長だ。趣味ではない。しかし、別に宝具に拘らなくても、むしろ拘らない方が現実味のある開発ができるのでは？趣味じゃないな。でも、趣味じゃないとするなら趣味以外に当てはまる言葉が見つからない。ならば趣味じゃない？いや、話の流れでは趣味になる。間違えた。いやいやでも……………

うむ、わからない。

とりあえず、僕の無趣味な男は嘘だという証明は出来なかった。

しかし、僕の思考が昔の仕事一色のものから一変した柔軟なものになっていることは示せただろう。

では次。

趣味関連で例え話をしよう。

前世で新入社員の紹介があり新しく二人がやってきた。

『そーっすねー、ゲームが趣味っすかね草』と自己紹介をする新人がいた。

最後の草が物語っている。

彼は陽キヤと呼ばれる人種だ。

昨晚の残業を言わせない笑顔で大人の対応をした僕の頭には、彼が

言うゲームとはサッカーゲームなのだろうと感じた。

だって金髪だったし。オールバック完璧に固めてたし。

ちゃんと仕事してくれるかと不安だった。

しかし、次に自己紹介を始めたもう一人の新人は『えーと、その、自分はゲームが趣味です、はい』と言う。

前後の反応でわかる。

彼は陰キャと呼ばれる人種だ。

下手に会話をして嫌がられないよう気をつけながら、彼が言うゲームはギャルゲーなのだろうと思っていた。

だってオタクだし。ぼさぼさ頭のメガネだったし。

まあ、真面目に働いてくれるだろう。

だが、そんな予想とは裏腹に、前者の新人は様々なゲームに手を出していて、後者の新人は銃撃戦だけを好んでいた。

金髪くんは優秀で、僕が頼むことは最後まで責任をもって取り組んでくれるいい新人だった。その優秀さを買われて上の会社にハンティングされていた。

逆に、オタク君は酷い。入社数ヶ月で慣れてきたのか態度が大きくなっていった。仕事を任せると嫌な顔をしてやりますと言う。振り返った時には舌打ちが聞こえ、仕事が間に合っていないじゃないかと問えば逆ギレされた。

つまり、ここで僕が言いたいののは、趣味とは相手に対して自分を知ってもらう手段にすぎないのだ。

しかも、今回のように相手の人物像を読み違えることもしばしば起こえる。

そうなる自己紹介に意味はない。

必要ないったら必要ない。

『ふふふ、笑顔の練習をしますたあは可愛かったですよ？』

「…そもそも、何故英語の授業の、しかもこの時期に自己紹介をしないといけないんだ」

『より高度な英文を使った高校生らしい内容ですよ？』

「…笑顔を作るのは高校生らしい内容なのか」

『小学生で身につきますう』

基礎ができていないとね、分かります。

このように、昔は社交辞令として覚えた笑顔がなくなった。

全く仕事しない表情筋を羨ましく感じるが、働かなかつたらそれはそれで面倒ごとは必ず付きまとうと僕は知っている。

今日も、海外経験のあるネイティブな発音をする先生にとってもとても目を合わせられながら笑顔の練習をさせられた。

正直、元社会人の僕にとって二度目の高校生は辛いものではない。

そこそこの大学に行って勉強はそこそこできていたため苦労は特にない。むしろ優秀と言われるくらいだ。

だから、今日は久しぶりに疲れた。授業は一時限目しか受けていないのに。

『防衛任務を平日の午後に入れても学校側が何も言わないのはますたあの人格ですなぁ』

「…学校が僕を見ていないということだ」

ほんと、こっちはサボる気満々なのだが教師は何も言わない。

大人しく成績も優秀。

見せかけは大事なのだ。

だから前世の偽オタク君。取り繕わないと昇進できないぞ！これこそ大人の社会の常識だ。

『何だかんだ言って、結局ますたあは真面目なんですよお』

やれやれ。

出会って数日で僕を理解することなど難しいのだ。

「…僕は本心で楽をしたいと思っている。真面目にしているのは周辺が慌ただしいだけだ」

——ピクッ

どうやら自分でフラグを建てたらしい。

サイドエフェクトが反応している。

それも、珍しく全身を駆け巡る特大の厄介事を知らせる感じがする。

足を止めた僕は携帯を取り出して連絡を待つ。すると数秒後、忍田本部長から着信が。

「…ネイバーですか」

『察知したか。阿宮、今何処にいる?』

「…ウチの高校からボーダーに向かう道の中間です」

『やはり君が一番現場に近い。中学校へ向かってくれ。イレギュラーだ』

「…了解」

即座にトリガーを使い、目的地を目指す。

「…ダイヤ。お前はこのイレギュラーな門ゲートについて知ってるか」

『ごめんなさいい。私い、本国の情報は基本的なことしか知らないんです』

「…いや、むしろ嫌なことを思い出させてすまなかった」

走り出した僕の後ろに引っ付いている自立型ブラックトリガーの

ダイヤは近<sup>ネイバーフッド</sup>界のものだ。

故にいくつかの情報を事前に聞いていた。もちろん、彼女をブラツクトリガーに変えた——アフトラトル——その情報も。

虫酸が走る話だが、実験体とされてきたダイヤにはアフトラトルの詳しい内部情報は伝わらない。

故に今回の襲撃の真髄はわからないとのこと。

そして、当時を思い起こす質問をしてしまったことに謝罪した僕に對して、ダイヤはねっとりとした笑い声を漏らしていた。

「…阿宮、もうすぐ到着です」

『先ずは学生及び教職員の避難を優先してくれ。今、嵐山隊が向かっている』

トリガーを使ったため連絡に携帯はいらない。

インカムから本部に連絡を取ると市民の避難を優先とのこと。しかし

「…ネイバーが一体倒れてます。他の隊員は？」

『何っ？阿宮以外に隊員は到着していないはずだ』  
「…報告は後で」

校門に着くと多くの学生が避難をしている。

事前に出現したのは二体のモールモッドだと聞いていたが、これまた何故か一体はトリオンが体から漏れて動いていないのを目視で確認した。

これを倒したのは誰か、という追及は後でいい。

今は任務を遂行するだけだ。

「…ボーダーの者です。中に残っている生徒はいますか」

「あ、あの！同じクラスの、三雲君が！残ってネイバーの足止めを……！」



「…三雲？」

「ボーダーに入ったばかりだったはずで……」

僕の質問に、一人の女子中学生が答えた。

彼女の言葉が本当ならば、その三雲君というC級隊員が今現在ネイバーを相手しているのだろう。

……いくつか思うことはあるがこれも置いておく。

「…了解した。君も早く避難を。情報感謝する」

「は、はい！三雲君をお願いします！」

息がまだ整っていないのか、女子中学生は顔を赤くして避難を再開した。

ちよ、ダイヤさん僕の服の中に隠れるのはいいですけど羽でつつんしないで。先端意外と痛いです。

『…まあ、夢見る少女にとって理想の展開ではありませんねえ』

「…何の話だ」

『とにかくう、今あ、私は激おこなのでえ力は貸しませんよう？』

「…もとよりそのつもりだ」

そう言うときダイヤはふーん、と言って黙ってしまった。

さて、もたもたしてられない。

速攻で処理しよう。

「…見つけた」

人影とともに、モールモツドの姿を発見した。

場所は校舎の二階。

わざわざ階段を登る必要は———宝具と認定された奥義には必要ない。

一瞬。

そう、一瞬でその身体を真つ二つにしよう。

「…グラスホッパー改」

標的との距離は約100メートル。

その間に二つのグラスホッパーを設置した。

しかし、ただのグラスホッパーじゃない。珍しく実用性を考えて編み出した強化版グラスホッパーだ。

孤月を手にした僕は刀を構えて足場を整える。

初動に準備をかけるようじゃこの奥義は腐ってしまふ。

瞬く間に標的を倒す流れを完成させた。

「……っ！」

そして、グラスホッパーに足を乗せる。

すると、全身に強烈な風圧が襲う。

そう。このグラスホッパー改は試作した結果、制御が困難としてお蔵入りしようとしている。

跳躍力が増したことで移動速度は上がったがその分身体への負担が大きく、そしてバランスを崩しやすいのだ。

——だから、僕はグラスホッパー改を二つ用意した。

ギリギリだったが二つ目のグラスホッパーの上に来た。

後は、二つ目を蹴る僅かな間に態勢を整えればいい。

相手との距離は——5メートル。

右手に携えた孤月の剣先は相手を貫かんと補足し、肩付近にまで手を引いて貫かんと力を蓄える。

モールモッドが二人の学生——片方はトリガーを持っているがトリオン体ではなく、もう片方は白髪赤目でこんな状況なのに落ち着いている——に注目しているが、例え僕の方を見ていたとしても、今

の僕の動きを捉えることは出来ないだろう。

一瞬、気のせいかもしれないが白髪の学生と目が合ったことに驚きはしたが、これで留めだ。

「…『壇ノ浦・八艘跳』」

彼の有名な源義経——幼名、牛若丸の逸話を元に生まれた宝具に認定された奥義。

八艘跳してないじゃんというのになしにして、その出力は強大だ。グラスホッパー改により敏捷を上げた一撃はガラス窓を突破して易々とモールモッドの身体を真つ二つにし、加速しすぎた僕は壁に激突する前に何とか止まることができた。

いやー、やつぱこれ失敗だわ。扱いづらい。あと空中に放り出されるのとか怖すぎる。

高所恐怖症になるわ。

先程までとは打って変わって静まった学校の廊下。

黙ってこちらを見る二人に気遣い、僕は尋ねた。

「…無事か、少年」

なんか、迅さんみたいで鳥肌たった。

あ、別に迅さんを馬鹿にしたんじゃないやありませんよ？ホントホント。